



2026（令和8）年2月24日発行
（編集）愛光本部
（TEL）043-484-6391
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

2026年の幕開けにあたり、愛光の各現場では新しい年を祝う晴れやかな活気に包まれました。伝統的な獅子舞の演舞や心温まるコンサートなど、新年ならではの行事を通じて利用者と職員が共に笑顔を交わし、穏やかで温かい時間を共有することができました。こうした日常のひとつを大切に積み重ねることで、幸先の良い一年のスタートを切ることができました。

本年も地域の皆様に支えられ、共に歩めることに深く感謝し、地域に開かれた法人として職員一同邁進してまいります。新しい一年が、皆様にとって光あふれる健やかな年となりますようお祈り申し上げます。

□事業経過など（2026.1.1～）

6	火	辞令交付式/業務執行会議
9	金	5S研修
14	水	経営層マネジメントトレーニング中期経営研修
17	土	理事会
18	日	家族会主催研修
19	月	佐倉圏域事業部実績会議
21	水	地域食堂ともいき
22	木	試用期間終了面接
23	金	本部実績会議
26	月	メンタルヘルス研修
28	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務プロジェクト
29	木	人事ワーキング会議/後援会運営会議
30	金	高齢者福祉事業部実績会議

■月報から

□ 新春恒例「第18回 小学生書初め展」(本部)

愛の灯台基金主催の「小学生書初め展」が1月10日から25日まで佐倉市南部地域福祉センターにて開催された。今年で18回目を数える本展には、南部地域の小学校5校から力作が寄せられた。開催に先立つ9日には、西田佐倉市長にご来館いただき、「市長賞」2作品を選出していただいたほか、「理事長賞」、「後援会会長賞」も決定した。

審査中、併設の児童センターに遊びに来ていた小学生たちが、並べられた作品を興味津々な様子でのぞき込む姿が見られた。また市長の存在に気付いた子供たちから「写真を撮りたい!」とリクエストがあがると、その場は即席の撮影会に早変わりし、子供たちの笑顔あふれるひとときとなった。愛光ホームページ後援会ブログにて作品を紹介していますので、ぜひご覧いただきたい。
(総務課長 宮本 典昭)

□ 食事が摂れない利用者…拒食の原因は身体的な要因か精神的な要因か…?

(めいわ)

昨年10月、新型コロナウイルスのクラスターが発生し、入所利用者にとっても大きな負担がかかった状況であったと推察される。そのような中、入所利用者(30代男性)に10月下旬頃より、食事を口に含んでは吐き出す行為が見られるようになった。

当初は散発的に見られる状況だったが、次第に頻度が増し、やがて一食分すべてを吐き出すようになった。夕食のみ摂取する状態が続いた後、体重は徐々に減少し、12月から1月にかけては10kg以上の体重減少が認められた。

1月に入ると、3食すべてを吐き出す、あるいは手をつけずに自ら廃棄する行動が見られるようになり、精神科の内服薬についても、一度は口に含むものの吐き出す状況となった。ほぼマンツーマンで付き添っての支援を継続している。

昨年末から家族への報告を重ねてきたが、今月ご両親およびご本人を交えて相談、ご意向を確認した結果、まずは消化器系等の身体的異常の有無について検査を行う方向となった。当該利用者は言葉による意思表出が困難であり、現在感じている苦痛や不安、違和感の具体的な内容を把握することは難しい状況であるが、原因が身体的な要因か、もしくは精神的な要因か、手探りで追究していくほかない。

現時点では食事摂取再開の明確な糸口は見いだせていない。高栄養補助食を摂取してもらいながら、精神科、協力病院、嘱託医と連携を図りながら、少しずつでも食事が摂取できる状態を目指し、引き続き支援を継続していく。
(めいわ課長 日野 史生)

□ 胃腸炎のクラスターが発生(リホープ)

1月6日、発熱および嘔吐症状のある入居者が1名確認された。2日後には、別の入居者に発熱・下痢・嘔吐の症状が出現し、その後、1~2日おきに入居者および職員へと症状が広がった。当初は2階入居者を中心とした発生であったが、中旬以降には1階でも発症が確認された。感染者が合計10名に達したため、印旛保健所疾病対策課へ連絡を行い、保健所による視察を受けた。保健所からは「現状の対応を継続すること」「今後、感染者が急増するなど収束が見込めない場合には、検便を実施する可能性がある」との指示を受けた。下旬には入居者・職員ともに発症者が各1名にとどまり、全体としては収束傾向が見られた。1月26日以降、新たな発症が確認されなかったことから、1月27日に嘱託医の判断で隔離等の対応を解

除し、1月29日より日中作業・日中活動を再開した。

今回の対応を振り返ると、初動対応が十分でなかった点は反省すべき点である。発熱・下痢・嘔吐といった症状が複数名に見られた早期の段階で、日中作業や活動の中止など、より踏み込んだ対応を講じていれば、感染拡大を一定程度抑えられた可能性がある。今後は、初期段階での判断基準と対応強化について、あらためて共有していく必要がある。

(リホープ副施設長 麻生 知明)

□ 新たな自主生産班の立ち上げに向けて（根郷通所センター）

外出先の一つであるサンセットヒルズ（キャンプ場）において、スウェーデントーチの営業を実施した。その結果、同施設は佐倉市魅力推進課および一般社団法人佐倉市観光協会の管轄であることが判明した。これを受け、佐倉ふるさと広場内にある売店での販売について打診を行ったところ、同広場での販売は問題なく実施可能であるとの回答を得た。また、サンセットヒルズ（キャンプ場）へのスウェーデントーチの導入についても前向きな反応があり、今後、具体的な条件等の詳細を詰めていく予定である。今回は初回の打ち合わせであったが、想定以上に前向きな感触が得られ、今後の展開に向けた明るい兆しが見え始めた。

次年度は、新たに自主生産班を立ち上げる計画があり、両団体（佐倉市魅力推進課および一般社団法人佐倉市環境協会）を切り口として展開を広げる道筋が明確になってきた。

(根郷通所センター所長 菊地 暁生)

□ 施設が綺麗になりました。（佐倉市よもぎの園）

昨年末から行っていた、園庭のアスファルト工事が無事終了した。工期は予定よりも延びてしまったが、その分、玄関前の古いアスファルトも打ち換えることができ、車椅子利用者も凹凸がない綺麗な地面に快適さがプラスされ使い心地が良くなった。玄関前などの敷設工事では人の立ち入りができなくなるため、急遽ではあったが土曜日に事業所を閉所して対応した。これからは、より一層、地域のイベントなどで大いに活用されることを願っている。今回の大規模な改修工事では佐倉市へ感謝は尽きない。

(よもぎの園 近藤 真一)

□ 地域との交流 ～パントリー事業～（ワークショップかぶらぎ）

15日（木）、あったか食堂ネットワークの交流会が佐倉市中央公民館で行われた。かぶらぎと佐倉社協がパントリー事業を立ち上げた際の目的の一つに「障害のある人と地域の人とともに支え合う関係づくり」がある。交流会はそれにうってつけの機会であり、毎回社協より誘いを受けている。夕方の開催のため、かぶらぎの作業時間とは重ならないが利用者とともに参加するようにしている。

現在、佐倉市内の子ども食堂・地域食堂の数はパントリー事業を開始した当初と比べるとほぼ倍の24団体となっており、会場では改めてその輪の広がりや、各食堂の勢いを感じた。交流会は食堂ごとに料理を一品ずつ持ち寄る立食形態で企画されており、料理を話題に多くの人々が交流を持つことができる。かぶらぎの利用者もテーブルを回って、料理を楽しみながら、いつもより少しゆっくりとした時間の中で食堂スタッフの方たちと関係を深めることができた。

(ワークショップかぶらぎ 宮部 和樹)

□ 地域連携推進会議（宮前の家）

1月24日に地域連携推進会議を開催した。昨年度の「ジョーの家」に続き、今年度は「宮前の家」の活動状況を中心に報告を行った。会議では入居者代表が、自らの意見を発表し、外部委員からの質問にも回答した。入居者からの声を通じ理解を深める貴重な機会となった。民生委員からも、今後、地域行事には声を掛ける旨の申し出があった。

近隣のグループホームより、地域連携推進会議への招待を受けた。他施設における「支援のあり方」や「地域との関わり方」を学び、自施設のサービス向上および地域ネットワーク作りの参考にしていきたいと考えている。
(宮前の家 高橋 健)

□ 年末年始(アシスト)

転送電話の体制で対応をしているが、例年では年末に年の瀬の気忙しさからか、利用者からの電話が多い。しかし今回に限っては年始に緊急対応ケースが舞い込んできた。「母の緊急入院に伴い、知的障害児の預かり先を探してほしい」という依頼である。時間は夜中の1時前・・・

結論としては、児童相談所で一時保護となった。佐倉市からの連絡があった際は、空き状況の確認等で、めいわの夜勤者に協力を仰いだ。今回は利用に至らなかったが、法人内に預け先として相談できる場所があることは心強い。緊急利用にはならなかったが、本人の情報を確認したところ、過去にもアシストへ他機関から相談歴があり、様々な理由で支援に繋がっていないケースであることが判明した。また特別支援学校への通学も出来ていない児童であった。本人・家族の状況から、日常的に相談ができる相手がおらず、孤立していることが伺えた。

今後はサービス利用に繋がらなくとも、母親が“相談しても良いかな”と思えるつながりを作ることを目的として定期訪問を行っていく。このケースは、居住地からかけはしの担当となったが協働していきたい。
(アシスト 小平 和俊)

□ 新しい年を迎え、晴れやかな気持ちの中で1月の活動がスタートした

(はちす苑)

新年ならではの行事や、冬の季節を感じられる取り組みを通して、皆さまとともに穏やかで温かい時間を過ごすことができた。年の始まりにふさわしく、笑顔と活気にあふれた一か月となった。

毎年恒例となっている獅子舞と太鼓演奏では、会場に力強い太鼓の音が響き渡り、その迫力にご利用者は、自然と背筋を伸ばして見入っていた。獅子舞が登場すると拍手や歓声が上がり、間近で見る伝統的な演舞に「立派だね」「今年も元気が出るね」といった声が聞かれた。獅子に頭を噛んでもらう場面では、無病息災への願いを込めながら、和やかな雰囲気の中で新年の幸先の良いスタートを切ることができた。長年親しまれてきた日本の伝統文化に触れ、心新たに一年の始まりを感じる貴重な機会となった。演者には、はちす苑に来場いただくようになってから今年で14年目になる。常に感謝の念に堪えない。今後とも末永くよろしく願いしたい。
(はちす苑課長 梶 直芳)

□ 地域ケア圏域推進会議 ～根郷角栄団地～

(佐倉市南部地域包括支援センター)

23日(金)、今年度2回目となる地域ケア圏域推進会議を開催した。自治会長や自治会防災

委員長、民生委員、高齢者クラブの代表者等地域で活動されている方々と、地域内のケアマネジャーや訪問看護事業所の看護師、薬剤師、社会福祉協議会などの専門職に参加いただいた。

今回は根郷角栄団地を対象とし、「地域の見守りや繋がりについて考える」をテーマに行った。「病気をきっかけに活動量が低下しているが、家族との食事会や旅行は継続したい希望がある。地域との関わりについては、あまり積極的ではない。」といった事例から、地域住民との関わりに対して消極的な方に対し、どのように見守り、繋がっていきけるかを検討した。ワークショップでは、地域住民には「地域にあったらいいもの」「住民・自治会としてできそうなこと」「何を大事に活動しているか」について、専門職には「地域とつながるためにできそうなこと」について考えてもらい、意見交換を行った。

根郷角栄団地は、地域内の住民同士の活動や見守り、防災対策等に対しての意識が特に高い地域だと感じている。今回の会議においても、20年以上前の自治会館リニューアルの時期の話し合いについて伺うことができた。当時は住民も皆若かったが、10年後を見据えて「10年後どんな団地になってほしいか」について話し合いを行い、「孤立しない」「定年を迎えた人に役割を持ってもらう」「自治会館をフルに活用する」という意見が挙がったとのこと。10年以上前から地域の将来を見据えて住民同士で対話を重ねてきたことが、現在の地域の活動や住民の意識に繋がっていると感ずることができた。

地域の見守りや繋がりについて地域住民・専門職それぞれの立場で何が出来るか意見交換を行うことで、お互いの考え方や思いを共有することができた。地域住民からは「独居や高齢化という要因のため、地域の活動に参加したいけどできないという方が多い。今後の自治会の運営についても存続できるかどうか課題だと思っている」と切実な思いが聞かれた。専門職からも「相談窓口まで足を運べないという方も多いので、自治会館などで出張相談を行えたらと思っている。」という提案があった。根郷角栄団地の自治会長からは「あくまで住民主体で地域の活動を行っていきたい」という思いがあったので、包括としては「地域と専門職を繋げることが包括の役割」とお伝えした。今後も地域に足を運びながら、地域からニーズがあがった際には専門職と連携しながら関わっていきたいと思う。

(佐倉市南部地域包括支援センター 森 由美子)

□ ニューイヤー・ファミリーコンサート (佐倉市南部児童センター)

今年で5回目となるファミリーコンサート。今回も「音葉ウインド・オーケストラ」様の協力を得て開催することができた。児童センターではPR手段に限られるため、スタッフが直接来館者に声をかけてコンサートの周知を行ってきた。毎年、笑顔で帰っていく来場者を思い浮かべると、自然と声にも力が入る。そこから母親たちとの会話が広がり、「うちの子は集団が苦手な…」といった不安を耳にすることもある。

コンサート当日は190名が来場し、会場は満員となった。イントロクイズやダンス、ディズニーやアニメソングなど、親子で楽しむ姿に胸をなでおろした。会場に入るのを嫌がっていた子が、知っている曲を耳にすると自然と中へ入り踊り出したり、集団が苦手と言っていた子が最初から最後まで聞き入っていたりと、心温まるエピソードも多く聞かれた。後日、「子連れでコンサートに行くのは不安だが、いつも遊んでいる場所なので安心できた」との感想も寄せられた。親子にとって非日常を楽しむ時間になったようだ。

(佐倉市南部児童センター 吉田 知加子)

□ ほう、れん、そう（学童保育所）

外遊びから帰って来た5年男子。すぐにごろりと寝転び、天井を見つめる姿に違和感を覚えた。「どうした？何かあった？」と、声を掛けるが「ううん、眠いだけ」との返答。自分は異動してきて数日であり、「気のせいかも」とも思ったが、それでも一点を見つめる瞳が潤んでいるように見えて気になった。ペアの職員に相談をすると、やはり「何かおかしい」ということになったため、保護者の迎え時にその様子を伝え、何かあれば教えて欲しいと伝え、降所した。すると、保護者が戻ってこられ、友だちとの遊具のやり取りが原因だったことがわかった。「やめて」「今はできない」など、思いを声に出せる児童ばかりではない。ましてや高学年になれば、低学年に合わせてあげようとする気持ちも芽生える。自分が我慢をすれば…と、過ごしていた気持ちが溢れてしまったのだ。

あの時気になっていなければ、あの時、相談できていなければ、あの時、声をかけずに降所していたらどうなっていただろうか。本人の気持ちもわからず、保護者の不安も増えたのではないだろうか。こういった日々のズレが蓄積し学童保育所への不信感に繋がっていくのだと感じた。

保育は自分ひとりで行うものではない。だからこそ職員は些細な事でも報告し合える、相談し合える、支え合える人間関係が必要である。複数の職員が様々なシフトで出退勤する中でも報告・連絡・相談ができる学童保育所になるよう、皆で育てていきたい。

（学童保育所 平野 美幸）

□ 地域住民のための講座の開催（佐倉市南部地域福祉センター）

「いしいさん家」代表の石井英寿氏が来所。「介護から地域を考える、昔の日本にあった忘れ物を取りに行こう」をテーマにした講演会が開催された。石井英寿氏は、地域に開いたごちゃ混ぜケア、高齢者に寄り添う豊かなケアを実践しており、メディアにも多数出演している。

習志野市実籾の「いしいさん家」では、宅老所の運営、ケアマネ事業・デイケア・障害者日中一時支援・その他自主事業を展開している。その後八千代市米本にて施設「52間の縁側」を開設。「通所介護事業」を中心として2022年から運営されている。「52間の縁側」は、2023年にグッドデザイン大賞を受賞しており、同所に集まる利用者のビデオ紹介では、障害者や認知症の高齢者など、利用制限の垣根を超えた活気ある生活の様子を見ることができた。石井氏の講義では、認知症の当事者と多く関わってきたことのケースについての考察や、本人の本心・欲求の種類、そして自身の祖母の看取りから経験した「看取り」のあり方などが紹介された。講義に参加した地域住民は、ほのぼのとした施設の様子に興味を持ち、「ぜひ施設を見学したい」と石井氏に伝えていた。

（佐倉市南部地域福祉センター 青山 秀人）